

終末期の悪の主役 — ギリシャの君とペルシャの君

(このレポートは、前回の「82 反キリスト [小さな角] はなぜ8人目なのか」のさらに続編という位置づけになります。ですから、言ってみれば、No.81、82、82 は「終末期の主役たち—三部作」というくくりで、この記事は第三部ということになるでしょうか)

No. 79 『「末の日」と「終わりの日」の相違点』の中でも少し触れましたが、今回注目するのは、ダニエル10章の天使たちの抗争の記述に関する部分です。

「ペルシア王国の天使長が二十一日間わたしに抵抗したが、大天使長のひとりミカエルが助けに来てくれたので、わたしはペルシアの王たちのところにいる必要がなくなった。」(ダニエル 10:13)

この音信を伝えた天使は、8章と9章に名が記されているガブリエルと同じであろうと考えられますが、この部分の流れを読んで、ダニエルの元に到着するまでのプロセスに関する記述のその真意を探ろうと、いくら考えても納得の行く推論を組み立てることができませんでした。

ペルシャの君が21日、三週間も抵抗。なぜ？ 目的は？。

音信を伝えさせないため？ これ以外の理由を考えることはできないように思えます。

ということは、ペルシャ担当悪霊はその内容をすでに知っていたということになります。

神から預かった言葉(預言)を目的の対象者であるダニエルに告げる前に、ペルシャの君に事前に伝える、などということがあるのでしょうか。それは極めて考えにくいように思えます。

仮に、そうではなくて、ペルシャの君が勝手に推察して、それを伝達させたくなかったとして、その理由として考えられるのは、ペルシャが倒されるということを知らせたくなかった？。ということになるのでしょうか。

では、「ギリシャの君」が現れるというのはどういうことでしょうか？

どこに現れるのか定かではありません。推察できるのは、敵はペルシャだけでなく、ギリシャも加わることになるということだけは分かります。

ガブリエルの所にミカエルが助けに来たのと同じように、ギリシャの君がペルシャの君を助けるために現れるのでしょうか。

しかし、この両者は、敵対している国のそれぞれの守護霊？なのだから、ペルシャの君をギリシャの君が応援のために駆けつけるということは、まずあり得ないでしょう。

或いはそれは、ペルシャに変わって、いずれ別の時にギリシャが来るということでしょうか。

目的は、ペルシャの君と同様でしょう。やはり何らかの「抵抗」をするために違いありません。ではギリシャが抵抗する理由は何でしょうか。

ギリシャの君が現れたその時点で、すでに音信はダニエルに告げられた後です。
この記述からは、ギリシャの君が現れる理由も目的もまったく不明、もしくは不可解です。

知られて不都合だと感じるとすれば、この音信の最終部分である 11 章の最後、去って滅び、これを助ける者はいない」という部分でしょうか。

しかし、ダニエルに伝えられた預言でペルシャ、ギリシャに関するものは、これだけではなく、他にも幾つかあります。

この音信に限って、これほどまでに抵抗するという、特別な理由は何も見当たりません。

ガブリエルによる、この情報つまり、天使と悪霊たちの抗争の記述は、殊更に他意はなく、いつものことだが、何となく今回、たまたま、気が向いたので伝えてみただけ。という類のものなのでしょうか。それとも、言外の何らかの意味が、そしてそうであるなる、やはり「終わり」に関する預言的な意味が含まれていると考えてみてもよいのでしょうか。

ギリシャの君は明確に、北の王として終末に至るまで、続いています。しかし他の国(バビロニア、ペルシャ、ローマ)もダニエル 2 章や 7 章を見ると、終末期においても単なる過去の帝国としてではなく、その時に影響を被るものとして扱っている事を考えれば、国同士の抗争、そしてその背後には、それぞれの国の黒幕(守護霊)としての悪霊たちの抗争も、最後まで続くのでしょうか。

仮に先のダニエル 10 章の墮天使たちの抗争の記述に預言的な意味があるとするれば、終末期を形づくる預言関連国の行動、関わりを示す預言的ひな型になっている可能性もあります。

さて、そうした状況をふまえて、1 つの可能性を探ってみたいと思います。

その時期、タイミングについてですが、「終末期」、(この表現はここでは、明確に、「艱難期」とも呼ばれる七十週最後の一週つまり七年間のことを指すことにします)の前後に生じる出来事を考慮してみましょう。

この「終末期」は、サタンが天から落とされてから始まります。

そのことが記されている黙示録 12 章の記録をまず検討します。

「天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。」(黙示録 12:1,2)

天にしるしがあり、「女」が見えます。

このゆえに、この時「女」は天にいる、という解釈も多く見られます。しかし、この解釈は論理的ではありません。

なぜなら、生まれた「子」はサタンに食い尽くされないように「神のもと」「神の王座」に「引き挙げ」られ、「女」は「荒野」へ逃げ、1260日間、保護されることになっているからです。

つまり、「女」が天におり、天で「子」を生んだのなら、天に挙げられる必要はなく「女」も「荒野に逃げる」必要もなく、また養われる日数が限定される理由もないからです。

「**龍は、自分が地上へ投げ落とされたと分かると、男の子を産んだ女の後を追った。**」(12:13)

明らかに「女」は地上におり、そこで「子」を産むということでなければなりません。

「天にしるし」が見えた」とは、内容が天的なものつまり「子」が天に挙げられる内容であり、神からの啓示ですから、「地上にしるしが見えた」という表現にはならないでしょう。

さて、この続く記述が、サタンが落とされる描写です。

「**天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。**

この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた。」(12:7-9)

先に引用した12:13から、サタンが地に投げ落とされたのは「女」が「子」を産んだ直後だということが分かります。

つまり、「サタンとその使いたち」は「子」が天に挙げられるのと入れ違いに地に落とされたということです。ですから、「子」は天において安全を得られるわけです。

したがって、7節の記述にある「天での戦争」は「子」が産まれる直前に生じていることが分かります。

「**天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。**」(12:7,8)

さて、この「女」は「エルサレム」であり「子」とは「14万4000人」のを表していると考えられます。

(これに付いての根拠は「32 啓示12章の[女]が[子]を産むとはどういう事ですか」及び、「09 [14万4千人]を改めて検証する」、「34 復活の種類と時についての考察」をご覧ください。)

それで、この天での戦争時に何が起きていたかと言うことですが、黙示録7章の記録から「額に刻印を押す」ことがなされていたことが分かります。それが終わるまでは、何も損なってはならない。つまり「艱難」の開始はまだ許されないと言うことです。

「わたしは大地の四隅に四人の天使が立っているのを見た。彼らは、大地の四隅から吹く風をしっかり押さえて、大地にも海にも、どんな木にも吹きつけないようにしていた。わたしはまた、もう一人の天使が生ける神の刻印を持って、太陽の出る方角から上って来るのを見た。この天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に、大声で呼びかけて、こう言った。「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大地も海も木も損なってはならない。」(黙示録 7:1-3)

つまり、14万4000人が証印を押され終わる(「子」が産まれた)と同時にサタンは落とされ、地に災いが始まることになり、艱難期、最後の一週が始まることになります。

地上で、この証印を押している同時期に、天で戦争が起きているのです。

サタンは「子」が産まれたら食い尽くそうとしていた、ということは、できれば「産まれる」事そのものを妨害したかったはず。彼らは、キリストと共に「蛇の頭を砕く、女の胤」に他ならないからです。

この「額に印を付ける」ことは「一人の天使」が仲間の天使と共に行う業ですが、サタンは、それらの天使に抵抗し、イスラエルに争乱を引き起こし、この人々、またこの業を何としても阻止しようとするのでしょ

う。恐らく、これが「天での戦争」を引き起こす引き金になるということでしょう。それで、イスラエルの君であるミカエルが立ち上がることになります。

さて、サタンは総元締めのような存在ですが、悪霊たちにも個性があり、それぞれに独自の願望、野望もあります。中でも個人的に(個霊的?)にサタンに近い価値観の者もいるのでしょ

う。そして、聖書が具体的に示している、その主な者が「ペルシャの君」と「ギリシャの君」です。さて、特にイスラエルに対する恨み辛み、ねたみ、憎しみを抱いているのが、イシュマエルです。今日アラブ人と言われる人々は「イシュマエル」の子孫とされています。アラブ人の多くはイスラームですが、イスラームの始祖ムハンマドは自らをイシュマエルの子孫としています。ペルシャは現代のイラン辺りを指します。

それで恐らく、イスラエルから14万4000人を選ぶ天使に抵抗する、主な悪霊は「ペルシャの君」に違いありません。具体的には、その時イランがイスラエルに対して何らかの攻撃を仕掛けようとすると考えられます。

この「抵抗」の期間が21日間ということかも知れません。

そして、このしるしを付ける業を終えたみ使いが去った後、ギリシャの君（北の王、小さな角）が「現れる」事になっています。

「彼は言った。「なぜお前のところに来たか、分かったであろう。今、わたしはペルシアの天使長と闘うために帰る。わたしが去るとすぐギリシアの天使長が現れるであろう。

しかし、真理の書に記されていることをお前に教えよう。お前たちの天使長ミカエルのほかに、これらに対してわたしを助ける者はないのだ。（ダニエル 10:20,21）

ダニエル書 10 章の内容は 11 章の最後まで続き、その最終的な状況は、他の多くの国々も一斉にイスラエルに向けて結集してくることを示しています。これが「神の大いなる日の戦争」「ハルマゲドン」です。

この記述から見る限り、ペルシャに次いでギリシャが起こり、そのまま終末、ハルマゲドンへ突入という内容になっており、ローマの存在は全く無視されています。

恐らくこれは、終末期の主役は、ギリシャ、そしてそれを補佐するペルシャであり、終末期に存在する復興ローマは単に、小さな角（ギリシャ）に利用されるだけの存在ということなのでしょう。

ここに、サタンー龍と、ギリシャー緋色の獣と、ペルシャー偽預言者という悪の三位一体が構成されるとみることができます。

「わたしはまた、竜の口から、獣の口から、そして、偽預言者の口から、蛙のような汚れた三つの霊が出て来るのを見た。これはしるしを行う悪霊どもの霊であって、全世界の王たちのところへ出て行った。それは、全能者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。」（黙示録 16：13, 14）

「獣と偽預言者の両者は、生きたまま硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。」（黙示録 19：20）